

「意味」の意味

横尾 信男

(平成元年9月28日受理)

The Meaning of 'Meaning'

Nobuo Yokoo

(Received September 28, 1989)

1.0 コミュニケーションは大別すると、ことばとそしてそれ以外のさまざまな要素から成り立っている。とりわけ、ことばはそのなかでひととき重要な位置を占めるものであることは改めて強調するまでもないであろう。私達はことばを媒介としてお互いに情報を伝えあい、挨拶を交し、意志の疎通をはかっている。通俗的な言い方をすれば、ことばには音声形式があり、意味がある。そして、ある音声がある意味に結びつくという対応関係が認められる。つまり、すべてのことばは意味作用(機能)を持っているわけである。この二つの項、すなわち記号表現と記号内容にどのような規則性が働いているだろうか。意味論の目標がことばという記号体系において何が何を表わすかを解き明かすことであるかぎり、意味論は言語理論の不可欠な部分であることは議論の余地がないであろう。とはいえ、意味論の扱う対象が必ずしもはっきりしているとは言えない。意味作用には、ことば以外の要素も含めさまざまな不確定要素が複雑にからみ合っているためである。意味はいかなる要素と関連づけてとらえるかによって理解が異なるものである。本稿では、まずことばの意味についての種々の考え方を述べ、次にそれをふまえながら意味の多面性について論ずることにする。私達が直観的にことばの意味と感じているものとは、いったい何なのであるか。それはただ単に内的なものとして心の中だけに求められるべきものだろうか。あるいは、その他の別な観点から考察されるべきものであるか。

1.1 What is meaning? (意味とは何か) と、ことばの意味を真向から問うことはそれなりに有意義であろう
教養部

が、J.ライオンズも言うように“Philosophers have debated the question, with particular reference to language, for well over 2000 years. No one has yet produced a satisfactory answer to it.”

(この問をめぐって、とりわけ言語との関連で哲学者たちははるか2000年以上にもわたって論議を重ねてきたにも拘わらず、まだ誰もこの問に対し満足な答を出しえたものはない¹⁾) その理由はいろいろあるであろうが、その一つとして「意味とは何か」という設問自体に問題があるという点が挙げられるであろう。それというのも、この間には二つの前提が結びついているからである。その一つは「存在前提」(presupposition of existence) といわれるものである。意味という何らかの形で存在するものであるかのような印象を与えがちである。もう一つは、「同質性前提」(presupposition of homogeneity) といわれるものである。意味という、何であれ性質上似ているか、さもなければまったく同一とみなされがちである。このような前提に立って意味を考察することは全面的に誤りであるとは言いきれないが、かといってそれが適切な方法であるとも言い難い。なぜなら、均質性もしくは同意性によって裏打ちされる実体としての意味というものがはたして取り出せるものであろうか。また、語の意味(語義)というようなものを、異なった構造レベル、たとえば文や談話などにおいても一定不変の意味として固定化できるであろうか。たとえば、語よりも大きな文を基本単位と設定するとして、その枠組の中で初めて生ずる意味もありうるのではないだろうか、などはなはだ疑問が多い。意味というきわめて曖昧模糊とした、とらえどころのないものに対してこのような迫り方をしたのでは抜き差しならないことにはしな

だろうか。つまり、もし意味論が上で見たような前提にとらわれるとしたら、語の意味の実質面そのものの妥当性まで深く関与することになり、收拾がつかなくなるのではないかというおそれがある。

「言語は、音声と意味をつなぐ」という広く流布している説にしても、ソーシャルはじめ多くの言語学者たちが指摘するように、ある種の誤解を招き易い。すなわち、これを文字通りに解釈すると、意味が物理的音声と同じように言語から独立して存在するものであるかのような印象を与えてしまう。かといって、意味を心的過程と結びつけて概念と同一視することも、「概念」という揺れの多い用語が明確に定義されない限り、意味の解明には役立たないであろう。その性質からいって実証性に乏しいものを意味を基礎づける手段として取り上げるわけにはいかない。さらに、意味をことばが喚起する視覚的・聴覚的イメージと結びつけて考えることの是非についてはどうであろうか。たしかに、特定のイメージが色濃く張りついている語もある反面、イメージを伴わないもの、希薄なものもある。たとえば、論理関係または関係概念だけを表わす英語の of や and のような機能語は当然のことながら固定したイメージというものを喚起しえない。もう一つの難点として、経験からも分かる通り、言語表現によって心に浮べる思いやイメージというものは各人各様あまりにも微に入り細に入りすぎている。要約的に言うと、以上のような意味のとりえ方はいずれも先に挙げた二つの前提に縛られており、その限りでは意味研究は観念的思弁的にならざるをえない。意味の本質を絶対的な形で究めようとすることは「言語学的意味論」

(linguistic semantics)の域を越えてしまう。それというのも「意味とは何か」という、いわば根元的な問そのものに無理があるためである。では、問をどのように定式化しなおしたらよいであろうか。

1.2 “What is the meaning of ‘meaning’?” (「意味」の意味は何か) ことばには実に種々雑多な使い方がある。意味ということばについても二重にその意味が問われる故因である。「意味」の意味という表現は、周知の通りオグデンとリチャーズに由来する術語であるが、一種のメタ言語である。意味ということばを重ねて用いることによって次元を異にする二種類の意味が区別される。その一つは、既出の意味、言いかえればものとしてのいわば実在論的意味であり、他はことばとしてのいわ

ば意味論の意味である。「意味」の意味を問い直すことによって、焦点が意味から「意味」に移ることになる。ライオンズはそのような重点の移動を論ずる中で、言語学的意味論を次のように定義している。“...semantics, is the study of meaning: i.e. of what is covered by the word ‘meaning’.”(意味論は意味、すなわち「意味」ということばによって言いまとめられる意味についての研究のことである²¹⁾) この新たな問は、複雑多岐にわたる意味の多様性を探り出す契機となりうるものである。突き詰めれば、ことばの同義(同意)性、両義性、多義性などを見究める理論、ないしは視点を切実に浮び上らせてくれるものではなからうか。次にこの点を例示したい。

次の一組の文中にみられる「意味」を比べてみよう。一瞥するだけで十分明らかなように(1)では、‘life’の語義(あるいは字義)が問われており、(2)では、lifeのより深化した意味が問われている。

(1) What is the meaning of ‘life’? (「生命」の意味は何か)

(2) What is the meaning of life? (生命の意味は何か) 独語に言い換えるとその差は一層明瞭になる。³¹⁾

(1) Was ist die Bedeutung von ‚Leben‘?

(2) Was ist die Bedeutung des Lebens?

(1)と問われたら、‘life’に相当する別の表現形式をもって答えればよい。(2)ではlifeの存在意義というような、学識や体験に根ざした何らかの意味説明が期待されている。言語学的意味論の観点から双方を比べると、(1)の‘life’は、語義あるいはそれに近いという点で中心的な使われ方をしており、一方(2)のlifeは特殊化された実質内容を担っている点で周辺的な(中心的な語義からへだたっていると、こみ入った)使われ方をしていってさしつかえがないであろう。

動詞mean(意味する)についても以下の例を検討すれば用法上の差は一目瞭然である。⁴¹⁾

(3) The French word ‘fenêtre’ means ‘window’. (仏語の‘fenêtre’は「窓」のことである)

(4) He is clumsy, but he means well. (あいつは器用な方ではないが根は良い奴だ)

(3)のmeanは「…に当る」の意で、等価関係を表わすのに対して、(4)のそれは(3)とはかなりかけ離れた別個の使われ方をしてい。intend(意図する)とほぼ解される。しかし、これに関して厄介なことは、こうした歴然と

したものばかりでなく中間的な意味合いの使用も数多くありうるとのことである。⁵⁾

(5) Be quiet! This means you. (静かにしろ。お前だよ)

(6) Smoke means fire. (火のないところに煙はたため)

(5)のmeanはinclude, (6)のそれはimplyによっておおむね置換可能であろう。しかしながら、注意すべきことは(3)~(6)のmeanには違いだけでなく、一定の基本的意味「意味する」が確立していることによっていずれにも共通する意義(sense)が認められるということである。その意味では、同質性の原理を頭から否定することはできない。にもかかわらずそのどれもがけっして同等ではない。そのずれや傾きはどのように示されるのか。この類の意味分析は、紛らわしいケースや比喩的転用も含めて議論の余地を多く残しているものの、言語学的意味論の重要課題の一つである。それらを単に言いまわしや慣用の違いとして片付けることができないことはたしかであろう。

2. ある語の意味を知っているとと言えるのは、その語がどのような場合にどのような使われ方をするかに習熟している場合のことである。つまり、他の語と区別されたその語独特の使い方を知ることが、ある語の意味を理解するというにはほかならない。語の意味というのはその語のしかるべき使い方を規定している使用条件である。ことばの意味の本質はその使用にあるとするヴィトゲンシュタイン以来の、この意味=用法説は、従来からいろいろと批判を浴びてはいるものの、コミュニケーションにおける記号としての言語の伝達機能に重要な関連性を示唆するものであることは想像にかたくない。この点に関してライオンズは次のように述べている。

“Another set of distinctions has to do with the variety of semiotic, or communicative, functions that languages are used for. Not everyone would agree with the proposal made by Wittgenstein, one of the most influential philosophers of language of his day, that the meaning of a word or an utterance could frequently be identified with its use. But there is clearly some kind of connection between meaning and use. And Wittgenstein’s emphasis upon this connection and upon the multiplicity of purposes that languages fulfil had the salutary effect of encouraging both philosophers and linguists, in the 1950s and 1960s, to question, if not always to abandon, the

traditional assumption that the role or basic function of language is that of communicating propositional, or factual, information.”

(もう一組の区別は、ことばが使われる多種多様な記号的あるいは伝達の機能に関するものである。ヴィトゲンシュタイン、彼の生きた時代におけるもっとも有力な言語哲学者の一人、が行った提案、すなわち語や発話の意味はしばしばその使用に一致するという提案を誰もが受け入れるとはかぎらないであろうが、意味と使用との間につながりがあることは明白である。ヴィトゲンシュタインがこのつながりと、ことばが充足する多目的を強調したことは、1950年代および1960年代における哲学者や言語学者をして、ことばの役割もしくは根本機能は命題的ないしは事実的情報を伝えることであるとする伝統的想定を放棄しないまでも疑問視するのを促す絶大な効果があった)⁶⁾

3. 意味を用法と言い換えたからといって意味の説明がいきよにつくとは考え難いが、このことが言語の多元化された機能面に注意を促した点を無視することはできない。これは意味研究の一つの新しい方向を提示したものと見えよう。すなわち、内面の心理的メカニズムに意味を探ろうとするアプローチを越えて、機能重視の扱いが起ってくる。R. ヤコブソンは“Le langage doit être étudié dans toute la variété de ses fonctions.” (言語は変化に富んだあらゆる機能において研究されねばならない⁷⁾)と説き、伝達行為の仕組と言語の果す重要な役割を次のように分析している。本節においては、ヤコブソンが組織立てたコミュニケーション・モデルについて検討を加えることにする。

まず、伝達が可能になるための要件に目を向けてみよう。コミュニケーションを作り上げる要素には(1)送り手、(2)受け手、(3)メッセージ、(4)コード、(5)コンタクト、(6)コンテキストがある。図式化すると図1のようになる。次に、メッセージがどの要素にきわだって方向づけられるかにより6つの機能が区分される。図2は図1に示したそれぞれの要素に対応する機能を表したものである。以下、6つの機能について順を追って略述する。第一に、ことばが果す諸機能の中で基盤となるのは「指示機能」(la fonction référentielle)である。これは、伝達されるべきメッセージがコンテキストに方向づけられるときに果す機能のことである。コンテキストとは、指し

CONTEXTE
 DESTINATEUR .. MESSAGE .. DESTINATAIRE
 CONTACT
 CODE

図1

RÉFÉRENTIELLE
 ÉMOTIVE POÉTIQUE CONATIVE
 PHATIQUE
 MÉTALINGUISTIQUE

図2

示したりするような直示的行為を介して把握される発話脈絡ないしは指示対象のことである。外界の事物の認知という作業はことばのこの働きなくして不可能である。だからといって、指示対象は常に明確な形で示されるとは限らない。一例を挙げるまでもないことだが、人間の身体の部分についていえば、どこまでが「頭」で、どこからが「顔」かについてさえ確定しにくい点があることに注意したい。外延的意味を担う基礎的な語においてすらそうである。ここに意味規定の難しさがある。第二に「表現的機能」(la fonction expressive)は、メッセージの焦点が送り手に向けられるときの機能をさす。その顕著な例として間投詞がある。文 *Ne dansez-vous pas?—Si, je danse.* の *Si* は通常 [si] と発音されるが、「もちろん」とか「喜んで」という送り手の気持をいささか力をこめて言う場合、母音を長めに [si:] と発音することも可能である。この [si] と [si:] の違いというのは音素的なもの(示差的特徴)ではなく、あくまで情緒的なものである。上述の指示的機能と表現的機能は互いに影響しあい、循の両面のように相互補完的であるという指摘がよくなされる。「水」という台詞は場面に応じて何十通りという感情表現が可能だそうである。第三に、受け手の側にメッセージの重点が置かれて伝達がなされる場合を「指令的機能」(la fonction conative)という。これは、受け手に働きかけて行動を起こさせることばの働きのことである。簡単な一例を示せば、“*Buvez!*”(飲め)というような命令の類である。このように直接激しい口調で命令することもあれば、「この薬はよく利くよ」のように形の上では陳述であるが暗示的に要求することもある。ここでは詳述することはできないが、送

り手と受け手の関係に基づいてことばの遂行的機能に焦点をあて発話行為を成立させるメカニズムを研究する分野が語用論 (pragmatics) であるという指摘だけにとどめておく。第四に、コンタクト (接触) への志向は「談話的(社交的)機能」(la fonction phatique) と呼ばれるものである。その典型的な例として挨拶やくだけた会話などがある。たとえば、次の夫婦の旅先での会話をみてみよう。「やれやれ、やっと着いたよ」というだけのメッセージを互いに飽きもせず何度も繰返して言っているところが面白い。⁸⁾

(A: le jeune homme, B: sa femme)

A: Eh bien.

B: Eh bien.

A: Eh bien, nous y voilà.

B: Nous y voilà, n'est-ce pas?

A: Je crois bien que nous y sommes. Hop! Nous y voilà.

B: Eh bien!

A: Fh bien! Eh bien!

G.リーチはこのような儀式めいた行為を“an eight-stroke ritual”と名づけている⁹⁾。掌で頭を8回撫であう代りにことばそのものを楽しむ行為のことである。このようなやりとりは、意味がないところに意味があるとも言える。第五に、発話の焦点がコードそのものに置かれる場合にメッセージの果す機能を「メタ言語機能」

(la fonction métalinguistique) という。コードとは、たとえば日本語という記号体系の語彙、意味、用法を含む種々の決まりのことである。送り手はこのコードを手だてとしてメッセージを作成し、受け手もまたこのコードに基づいてメッセージを解読する。ところが、ややもすると伝達の当事者である送り手、受け手が同一のコードを共有していないという事態が起こりうる。そうするとメッセージはもはや伝達の役を果せなくなる。そこで、互いに共通のコードを使っているか否かの確認を迫られることになる。言語学習の過程においてそのような例には事欠かない。“*Et qu'est-ce qu'un sophomore?—Un sophomore est un étudiant de seconde année.*”(で、sophomore って何のこと?—二年生のことさ)¹⁰⁾ 対象言語 (sophomore) についての言いかえ (un étudiant de seconde année) をメタ言語という。メタ言語は、理論的にはとめどなく無限に拡大していく可能性がある。ことばはこのように際限なく重ねて用いることのできる性質を備えている。鏡を何枚も重ねてそ

の中に自分の姿を写し出す現象にたとえられるこの性質を「自己再帰性」とも「自己反射性」ともいう。最後に第6として、メッセージ自身にアクセントが置かれる場合、メッセージは「詩的機能」(la fonction poétique)を担う。この機能は当然のことながら、詩のような芸術的創作に深く関わっている。詩において作者は言語に内在する美を追求する。言語を手段化するのではなく、自己目的として新しい意味作用を生み出す。読者はそれを詩の中に読み取ろうとするのである。また、詩的機能は、詩的表現の領域にのみ局限されるべきものではなく、日常的な卑近なことは遣いの中にもいかになく発揮される。たとえば、“l'affreux Alfred” (鼻つまみ者のアルフレッド)においては〔a〕音の繰返しが私達の注意を引きつける。頭韻をふむことによって音の響きを快くしている。Alfredと他の形容詞、たとえば terrible, horrible, insupportableあるいはdégoûtantなどの組み合わせでは同様の音的効果は期待できないであろう。

さて、詩的機能は極端な場合には既存のコードを逸脱したり越えたりすることがありうる。たとえば、「雪」を「ちょうちょ」と言ったりすることがある。これは、風にあおられてひらひらと空に舞い上る粉雪の軽さが、ちょうちょに移されてその特徴を表わす喩えに使われたものである。また、「ボーイ」がある種の「女の子」に適用されたりする。この場合も「ボーイ」の意味成分の一部が「女の子」に転用されていると考えることができる。¹¹⁾ 一見矛盾しているようにみえるこのような比喻表現も、コードの支えがあって初めて起こりうることであり、より豊かなコードの中に組みこまれることによって動的に機能するコミュニケーション体系が作り上げられている。

以上、ヤコブソンの言語機能論を取り上げ、かいつまんで述べてきたが、彼の結論を次に引用しよう。

‘Chacun de ces six facteurs donne naissance à une fonction linguistique différente. Disons tout de suite que, si nous distinguons ainsi six aspects fondamentaux dans le langage, il serait difficile de trouver des messages qui rempliraient seulement une seule fonction. La diversité des messages réside non dans le monopole de l’une ou l’autre fonction, mais dans les différences de hiérarchie entre celles-ci.’

(この6つの要因はそれぞれ別個の言語機能を生み出す。たとえ私達が言語にこのようにして6つの基本的な相を

区別したとしても、ただ一つの機能だけしか果さないメッセージを見出すことは困難であろう。メッセージの多様性はどれか一つの機能に独占された形で存在するのではなく、いくつかの機能の階層関係の違いに存在するのである)¹²⁾ たとえば、文“I feel like a cup of coffee” (コーヒーが一杯飲みたい)の機能は指示的であると同時に表現的でもあり、また状況によっては指令的ともとれる。重要なことは、どの機能をもっとも優位に立っているか、どの要素をもっとも強く前面に押し出されているか、である。機能主義的観点から言語の意味機能をここであえて問い直すとすれば、What is the communicative function of language? と言い表わすことができるであろう。これは、私達にとって大変興味深いテーマであるが、記号論や語用論などの研究成果をふまえて今後十分に検討されるべき事柄であろう。

4. G.リーチは、ことばの意味を7つの型に類別している。そのなかで「概念的意味」(conceptual meaning)が核心的部分をなすものと措定されている。それに対して彼が「連想的意味」(associative meaning)と呼ぶものがあり、これは次の5つに下位区分される。「内包的意味」(connotative meaning), 「文体的意味」(stylistic meaning), 「感化的意味」(affective meaning), 「反映的意味」(reflected meaning), そして「連語的意味」(collocative meaning)の5つであり、これに「主題的意味」(thematic meaning)を加えると7つになり、リーチはこれを「意味の7つの類型」(seven types of meaning)と称している。¹³⁾

「概念的意味」とは、一定した語固有の意味のことである。これはかなり少数の有限個の意味特徴の束によって示し得るものである。簡単な例で示すと、‘woman’の中心的語義は〔+Human, +Adult, -Male〕((人間, 成人, 非男性))という抽象的な3つの成分の総和である。このような3つの示差的特徴の組み合わせによって‘woman’を類似の他の語、たとえば‘boy’〔+Human, -Adult, +Male〕((人間, 非成人, 男性))から区別することができる。このようにして規定される意味をリーチは「意義」(sense)と呼んでいる。比較的少数の特徴や規則の運用によって言語の音韻構造や統語構造を体系的に記述しえたのは生成文法の日ごましい功績である。意味構造の面でもこのことがどこまで可能かについては論者の意見の分かれるところであるが、同じことが

	1. CONCEPTUAL MEANING or Sense	Logical, cognitive, or denotative content.
ASSOCIATIVE MEANING	2. CONNOTATIVE MEANING	What is communicated by virtue of what language refers to.
	3. STYLISTIC MEANING	What is communicated of the social circumstances of language use.
	4. AFFECTIVE MEANING	What is communicated of the feelings and attitudes of the speaker/writer.
	5. REFLECTED MEANING	What is communicated through association with another sense of the same expression.
	6. COLLOCATIVE MEANING	What is communicated through association with words which tend to occur in the environment of another word.
	7. THEMATIC MEANING	What is communicated by the way in which the message is organized in terms of order and emphasis.

ありうることは十分考えられることであろう。

「内包的意味」は指示対象から生じてくる意味であるが、概念的意味とは対照的に安定度が低い。つまり、個人差も、時代差も、文化差も大きいため明確な記述がむずかしい。たとえば、'woman' という語は無数の多彩な連想を伴う。「母性本能の豊かな」は女性特有の性質であるとしても「勤勉な」、「優しい」、「感受性が鋭い」、「おしゃべりな」、「気紛れな」、「か弱い」などについてはとくに個人的なずれの生ずる度合いが大きい。したがって、内包的意味は、語の弁別的特徴としてではなく含意として認められるにすぎない。論理学でいう上位概念(たとえばhuman)は下位概念(たとえばfemale)と較べて「外延」(その語が表わしうる対象の範囲)は大きい、「内包」(その語が表わしうる対象の特徴)は小さい。¹⁴⁾ 逆の言い方をすれば、内包的意味の大きい語は概して、概念的意味が小さいということになる。飼猫マイケルの特徴のいくつかは、その上にある「猫」と言った時に抜け落ちてしまう。

あらゆる言語表現はその概念的意味のほかに「文体的意味」を持っている。次の一対の文は概念的には同義だが、文体的には異なる次元に属している。¹⁵⁾

They chucked a stone at the cops, and then did a bunk with the loot. (奴らはサツどもに石をぶっつけて、現ナマを持ってズラかった)

After casting a stone at the police, they absconded

with the money. (警察官たちに投石したる後、一味は現金を所持せるまゝ逃亡せり)

両文の違いは語彙や構文の違いに如実に表れている。上は俗語、下は紋切り型である。文体的意味は、その表現がどの歴史的段階において、どのような個人もしくは社会的グループによって、どのような地域で、どのような媒体として用いられるかなどさまざまな観点から分類される。

「感化的意味」は、ある表現について個人的感情のかもしれない雰囲気、あるいは主観的な評価に関係している。たとえば、花鳥風月を表す語に接した際、日本人ならばたいていある種の情緒を感じずるものである。人によっては快さを感じたり、あるいはわびしさを抱いたりする。他の例でいうと、次に掲げる文はいずれも人を静かにさせようとするときの言い方である。¹⁶⁾

I'm terribly sorry to interrupt, but I wonder if you would be so kind as to lower your voices a little. (お邪魔してまことに恐縮ですが、どうか声をもう少し小さくしていただけませんか)

Could you keep it down, folks? (皆さん、お静かに願いたいのですが)

Will you belt up. (静かにしてくれないか)

Shut up! (黙れ)

最初の例はていねいだが後の例になるにつれて話し手の感情が激化し「強い意味」が表出されている。このような場合、感情表現にはある種の感化性の尺度が考えられており、その尺度に従って意味の強弱が測られるものと思われる。つまり、感化的意味は正しい表現を用いるための使用条件の一部を成していることは明らかであろう。

次に、「反映的および連語的意味」について一言ふれておきたい。最後の「主題的意味」についてはいわゆる文法の意味として扱われるべきものと思われるので説明を省く。「反映的意味」はとりわけタブー語などに見られる現象で、たとえば、「おんどり」を表す'cock'という語は、タブー視されている性的なイメージを伴うためももとの無色中立的な意味が廃れて、その意味では'rooster'にとって代わられる運命にある。

連語を成す、たとえば形容詞と名詞が形成する意味を「連語的意味」という。prettyはwomanと、handsomeはmanと共に用いられ、この組み合わせはほぼ一定している。しかしながら、handsomeがwomanと共に起することもありうる。ただし、その場合は意味の異同を伴う。

また、互いに排除しあって容認されない組合せもある。なぜ容認されないかの問題については、認識パターンに基づく普遍的な理由によるものか、あるいは単にその結びつきが存在しないという偶発的な理由によるものかであろう。選択制限をめぐってはusage levelの研究が進められているばかりでなく、意義素などの意味組成の分析法が適用されているが、その検討の範囲をまだ多く残しているといえよう。

5. 冒頭にも断ったように、ことばの意味というところから議論が絶えないが、意味を外延 (denotation) と内包 (connotation) とに二分して考えようとする説が、観念論的な傾向を帯びながらも低流としてあった。この知見が今日の意味研究に対して与える影響には測り知れないものがある。現に、それは指示的機能や表現的機能の概念と結びついてヤコブソンのコミュニケーション論にも登場し、さらにリーチの概念的意味や連想的意味の分類原理としても細分化された形で受け継がれている。意味を構造として定着させることを目指す言語学の意味論の理論構成にとってもこの対立は密接な係わりをもっている点を見逃すことはできない。意味の流動性を積極的に評価しようとする主張が一方にあるが、本稿では構造的な観点から「意味」の意味をどのようなものとして理解すべきかについての数々の試みや思索を概観した。それを裏付ける実証的な分析や記述については稿を改めて論じたいと思う。

〔 注 〕

- 1) Lyons, John, *Language and Linguistics, An Introduction*, Cambridge University Press, 1981, p.136. 本節の論述はおおむね同書の第5章「意味論」に負っている。
- 2) J.ライオンズ『前掲書』138 ページ。
- 3) Lyons, John, *Die Sprache* (übersetzt von Christoph Gutknecht), C.H. Beck, 1983, p. 130.
- 4) 注(1)の文献 139 ページ。
- 5) F. ロボ, 津田葵, 楠瀬淳三『英語コミュニケーション論』大修館書店, 1984, 86 ページ参照。
- 6) 注(1)の文献 140 ~141 ページ。
- 7) Jakobson, Roman, *Essais de linguistique générale*, Editions de Minuit 1963, p.213. 本節の論述は同書の 213 ページから 220 ページにそ

って展開している。

- 8) R.ヤコブソン『前掲書』217 ページ。
- 9) Leech, Geoffrey, *Semantics*, Penguin Books, 1978, p.63.
- 10) 注(7)の文献 218 ページ。
- 11) 池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書, 1948, 99 ページ。
- 12) 注(7)の文献 214 ページ。
- 13) 注(9)の文献とくに10~27ページ参照。本節の論述は同書をよりどころにしている。
- 14) 池上嘉彦『意味論』大修館書店, 1975, 286~302 ページ参照。
- 15) 注(9)の文献17ページ。
- 16) 注(9)の文献18ページ参照。

〔 参 考 文 献 〕

- ピエール・ギロー『意味論』(佐藤信夫訳)白水社, 1958.
- ピエール・ギロー『記号学』(佐藤信夫訳)白水社, 1972.
- 池上嘉彦『意味論』大修館書店, 1975.
- 池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書, 1984.
- Jakobson, Roman, *Essais de linguistique générale*, Editions de Minuit, 1963.
- Leech, Geoffrey, *Towards a Semantic Description of English*, Longmans, 1969.
- Leech, Geoffrey, *Semantics*, Penguin Books, 1978.
- ロボ, F.ほか『英語コミュニケーション論』大修館書店, 1984.
- Lyons, John, *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge University Press, 1968.
- Lyons, John, *Language and Linguistics*, Cambridge University Press, 1981.
- Lyons, John, *Die Sprache* (übersetzt von Christoph Gutknecht), C.H. Beck, 1983.
- Ogden, C.K. and Richards, I.A., *The Meaning of Meaning*, London: Routledge & Kegan Paul, 1923, 10th edition, 1972.
- Saussure, Ferdinand de., *Cours de linguistique générale*, Payot, 1916 (la troisième édition 1971).

Summary

The purpose of this paper is to make a critical review

of the semantic theories developed by John Lyons and Geoffrey Leech, which I will discuss respectively, focusing on the key notions of *meaning*. According to Lyons, the term *meaning* itself is subject to manifold interpretations, which have not been clearly elucidated. What are some of the advantages of talking about the meaning of 'meaning' instead of talking about *meaning* itself? Will this shift of focus give us a clue to the better understanding of the diversity of *meaning*? Leech attempts to give an account of what he calls "seven types of meaning" and provides us with a new direction of research on the subject.

We notice that our language activity is a complex mix-

ture of different aspects. These aspects are often studied under the title of 'uses' or 'functions' of language. Roman Jakobson offers a six-fold classification of language functions upon a communication model which consists of six factors. Each of these six factors determines a different function of language, as shown in Figures 1 and 2. In the course of this study I have come to realize that most of the recent works on semantics are still under the strong influence of the dual features of meaning: denotation and connotation. Let me point out finally that my central concern in the present paper is confined to the theoretical concepts of meaning and their implications.